

火打ち石の使い方

国立吉備青少年自然の家には、6セットの火打ち石があります。火打ち石のセットは、火打ち金と石からなっています。使い方はいたって単純で、鉄と石をぶつけたときに飛び散る火花を利用して、火を起こす——というものです。

しかし実際には、飛び散った火花は一瞬で消えてしまいますし、準備した火口（ほくち）にうまく火花を落とすことも相当困難な作業です。火打ち金や石を手にもぶつけて、痛い思いをすることも少なくありません。

しかし、火打ち石自体は、テレビの時代劇などでよく知られた火起こし方法なので、子どもたちの関心を引くには効果的な小ネタではあります。

【使用方法】

- (1) 利き手に火打ち金を、反対の手に石を持ちます。使いにくければ、逆でも構いません。火打ち金は、焼入れをして硬度を増した鋼です。石については、セットとは別のものでも代用がききますが、硬くて角がとがった物でなければ使えません。
- (2) 火打ち金を石にぶつけて、火花を散らします(全くの余談ですが、魔除けのために「切り火」を行うときは、これとは逆に石を火打ち金にぶつけます)。名前は火打ち石ですが、火花となって飛んでいるのは石ではなく、鋼鉄の破片です。
- (3) 火口は、地面や作業台の上に置いておくか、石の上に重ねて持って打撃の瞬間に発生する火花を直接受け止めます。



【事故を発生させないための注意】

- 軍手などを着用させましょう。
- 火花のほか、石の欠片が思わぬ方向に飛ぶことがあります。保護メガネを着用させたりまわりの友だちに気を付けさせたりするなど、安全上の配慮を怠らないようにしましょう。
- 火打ち石による火起こしは、本来それ自体が目的ではなくて調理やキャンプファイヤーなどのための手段ではあらずです。しかし、万一完全に失敗した場合、調理ができないとなれば、これは大きな事故です。バックアップの方法を準備しておきましょう。

【指導上の留意点】

- 火花を直接新聞紙の上などに落としても、そのまま新聞紙から炎が上がるようなことはありません。特製の火口を準備するなど、事前の準備が大切です。特製の火口は、閉じた空き缶の中で脱脂綿などを焼いて（炭化させて）作ることが出来ます。それでも、火打ち石で火を起こすことは、非常に困難です。
- 江戸時代には、火起こしの技術はすでに確立していました。しかし実際には、どの方法も現在のマッチやライターのように手軽なものではありませんでした。そこで当時の人々は、火を起こすことよりも消さないで取っておくことに工夫を凝らしました。
- 火打ち石による火起こし体験はあくまでも小ネタであって、それ自体を活動プログラムとすることは出来ません。しかし、上記のような先人の苦労や知恵をふまえれば、「自然に対する畏敬の念」や「火を大切に扱う心」を涵養したり「先人の努力」に思いをはせたりするなど、ふだんとは違う特別な時間を過ごすことが可能となります。活動のための十分な時間を確保しましょう。